

日頃、私たちが見ている物事は、ほんの一面に過ぎません。三者三様、十人十色といった言葉がある様に、人によって捉え方、見方が違うことがあり、中には真逆に物事を捉えることさえあります。

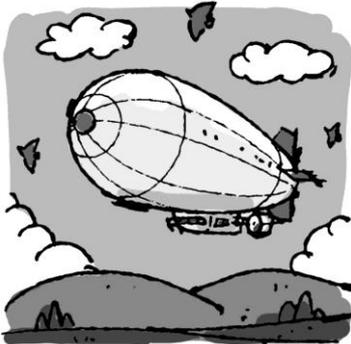
例えば、初対面の人に対して、抱く印象が違うことがあります。一人は、「とても明るくて、活みなぎる人だな」と思えば、もう一人は「騒々しくて、粗野な人だな」と思うなど、捉え方がまったく違うことが往々にしてあるものです。

基本的に私たちは、これまでの体験や経験に則して物事を捉え、判断することがあります。従って、様々な体験・経験を積んだ人、また種々の書物に精読している人、多くの講演、研修等に参加している人は、「人」としての器が広がり、大局的な視野で物事を捉えることができるようになるのです。

倫理研究所の事業の一つに「地球倫理の推進」活動があります。一九九九年（平成十一年）に「地球倫理の森」を創成する事業に着手してから、昨年二十周年を迎えました。

中国・内蒙古自治区にあるクブチ沙漠と、二〇一五年（平成二十七年）よりウランブハ沙漠に、これまで七十二隊、延べ参加人数、約二千四百名を送り、約四十三万本の植林を成し遂げました。

沙漠の植樹は地球環境の保全に貢献するだけではありません。実践活動を通して参加者の心の浄化にもつながり、これまで多くの感動が生まれ、それらが積み重なって、二十年という歴史を有する活動になったのです。



大自然の偉大さに触れ

自身の課題の突破口を探る

四十代になるAさんも、先輩に誘われて十数年前に沙漠緑化活動に参加した一人です。植林活動に参加する過程で、物事を捉える視点が変わり、これまでに味わったことのない体験をしました。

これまで複数回、緑化活動に参加していた先輩に「Aくん、人生観が変わるよ！」と幾度となく声を掛けられていました。あまり気乗りがしない中、先輩にはだいたいお世話になっているし、地球環境にも貢献できるのであれば、「と行く決意をしたのでした。」

植林活動に携わって、最終日のことです。スタッフの一人が、「沙漠の中を歩き、周りに誰もいない中、その大きな沙漠に身を投じると世界観が変わりますよ」という話をしてくれました。

Aさんは長めの休憩時間を利用して、実際にやってみたのです。ひたすら沙漠の中を歩き、三百六十度、見渡す限りに、沙漠地帯が広がっており、その中に身を投じた時でした。すべてを包み込む大自然の雄大さ、それに比べて自身のあまりのちっぽけさに、驚きを禁じ得ませんでした。

そして、Aさんの心の中で変化が生じたのです。その当時、抱えていた悩みや課題も、共に小さなものだと思え、心が軽くなる感じを得たのです。

帰国してからも、悩みが、なくなったわけではありません。しかし、自身に課せられた課題に前向きに取り組んでいるAさんがそこにはいました。これは視点が変わり、心持ちが変わったことによって得た尊い体験です。